

と く
徳

ほ う
朋

いのちより大切なものとは

たばた まさひさ
田畑 正久



たばた まさひさ
1949—現在
大分県出身。医学博士。佐藤第二病院院長。龍谷大学大学院教授。『歎異抄』に聞く会を主催。

星野富弘^{ほしのとみひろ}さんという、詩人で絵を描く方がいらっしゃいますね。この方は二十代で^{せきざいそんしょう}脊髄損傷になって、首から下が麻痺してしまいます。その星野さんが詩の中で、「いのちが一番大切だと思っていた頃、生きるのが苦しかった」とおっしゃっています。この世間の世界で、病気や障害をなくして、健康で長生きしていくことが大切だと思っていた頃は、生きる事が苦しみであったと。星野さんにとっては、そういうものは全部^{そこ}損なわれているわけですから。

けれども、星野さんは続けてこう書かれています。「いのちより大切なものがある日、生きているのが嬉しかった」と。

つまり、この世間の世界が全てではない。その世界を超えた、仏教で言うならば仏さまの智慧と慈悲の世界、南無阿弥陀仏のはたらきの世界があるということに気付いた時に、障害や病気をもちながらも、生きているということが嬉しかったと。苦悩を乗り越えてそこに喜びがあることを知り、人生でいろんなことを経験していくことは、人間として成熟し成長していくことに^{つな}繋がっているということを知ったと、星野さんはおっしゃっているのでしょう。

目に見えるいのちが全てだとするならば、老病死は避けて通って、それから逃れる道を追い

求めていくしかありません。しかし老病死には誰もが結局つかまってしまいます。しかし、いのちよりも大切なものがあると知って、世間の世界は目に見えない世界によって支えられていると気付いた時、お念仏で支えられているという世界が分かった時に、病気をもったまま、障害をもったまま生きている事が、そのまま喜びになっていくわけです。こういう世界をいただいでいく中で、他者の理解と共感という事も、だんだん出てくるんじゃないだろうかと思うんですね。

老病死のいのちを生きている私たちにとって、「私の思い」と「私の現実」との差を小さくするというのが、苦しみや悩みを小さくしていく事になるんだ、ということを最初に申しました。これまでの医療では、「私の現実（病気・障害）」をひたすら「私の思い（健康・障害がないこと）」に近づけるという取り組みだけをしてきました。しかし、これからの医療や対人援助は、いかにして「私の現実」を認め、老病死を含んだ生を受け入れていくことによって、悩める人の苦悩を少なくするという取り組みが必要になってくると思います。そこにおいて、医療と仏教が共に手を携^{たが}えていく大きな意味があるのではないかと感じています。

（『生と死を見つめて』）

健康で長生きこそが幸せの条件という世間の価値観であれば、私たちの人生は最終的に絶望しかありません。直面する「老・病・死」を思い通りにしていくのではなく、その限りある命の事実こそが、私の人生を輝かせる縁となっているのだと思います。（哲弘 拝）



この「徳朋^{とくほう}」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。

